

## 中国南部におけるビワサビダニ (仮称) の分布

大久保宣雄\* (長崎県果樹試験場)

**Distribution of the loquat rust mite (tentative name), *Aceria* sp. in southern China.**  
Nobuo OHKUBO\* (Nagasaki Fruit Tree Experiment Station, Omura, Nagasaki 856)

**Key words:** distribution, loquat rust mite, southern China

ビワサビダニ (仮称) *Aceria* sp. は、ビワの施設栽培で被害が大きい果実のたてぼや症の発生原因であり (大久保 1995 a), 毎年防除の対象となっている重要害虫である。本種はビワ属のビワ *Eriobotrya japonica* のみに寄生し、台湾ビワ *E. deflexa* やクルミハビワ *E. prinoides* には寄生しない (大久保 1995 b)。また日本の主なビワ自生地での分布が確認されている (大久保 1995 b)。ビワは中国南部からヒマラヤ南部地域が原産地で、ビワサビダニの日本への由来を明らかにするためにはこれらの地域における本種の分布を確認する必要があるが、そのような調査例はない。1994年から1996年にかけて中国南部地域を中心にビワ産地を調査する機会があったので、それらの地域のビワにおける本種の寄生の実態をまとめて報告する。

本種の同定をしていただいた千葉県農業試験場上遠野富士男氏に感謝します。

### 方 法

第1表に示した時期に中国南部を中心に各地にビワ栽培地あるいは公園内などのビワ樹の花房の苞および伸長停止芽のりん片に寄生するビワサビダニの成虫と幼虫の寄生数を実態顕微鏡あるいはルーペで調査した。各地点で調査を行った花房および伸長停止芽の数は3~15で、各々3~5の苞あるいはりん片を調査した。なお各地点とも苞あるいはりん片をアルコールで洗浄し、成虫を数10個体ずつ持ち帰り、顕微鏡下でビワサビダニであるかを同定した。

### 結果および考察

調査地点のうち、陝西省臨潼県以外の各地にはビワの栽培地があり、それらは陝西省漢中市を除けば、すべて長江 (揚子江) 以南の地域であった。

第1表 中国各地におけるビワの伸長停止芽および花房の苞におけるビワサビダニ密度

調査時期	調査地点	ビワサビダニ密度
1994. 7.10	台湾省台北市 (台湾大学)	3.6
1995. 4.30	陝西省臨潼県 (華清池)	9.7
5. 1	" 漢中市 (碑林)	10.0
5. 3	四川省成都市 (望江楼)	5.3
5. 5	湖北省武漢市 (黄鶴楼)	7.0
1995. 8.12	陝西省臨潼県 (華清池)	9.9
8.20	上海市 (玉仏寺)	17.0 <sup>a)</sup>
11.21	福建省福州市 (龍潭)	11.7 <sup>a)</sup>
11.22	" " (農科院果樹研)	12.3 <sup>a)</sup>
11.23	" 福安市 (甘藷鎮)	26.0 <sup>a)</sup>
11.23	" " (農科院茶研)	27.0 <sup>a)</sup>
11.25	上海市 (錦江飯店)	37.0 <sup>a)</sup>
1996. 1.11	広西壮族自治区桂林市 (広西師範大)	7.8 <sup>a)</sup>
1.13	雲南省路南彝族自治州 (石林)	12.5 <sup>a)</sup>
1.14	" 昆明市 (龍門)	6.2

a) 花房の苞

\*現在 長崎県総合農林試験場

\*Present address: Nagasaki Agricultural and Forestry Experiment station, Isahaya, Nagasaki 854

第1表に中国各地のビワの花房の苞あるいは伸長停止芽におけるビワサビダニの密度を示した。いずれの地点の個体もビワサビダニと同定され、中国各地のビワには日本と同じビワサビダニが分布していることが判明した。また伸長停止芽よりも花房での密度が高いことも日本における結果と同様であった(大久保 1995 b)。

ビワサビダニはビワに特有の種でビワの分布する東アジアのうち中国、日本に分布することが明らかになったが、その分散の経過は不明である。サビダニ類は微小で自力による分散力が弱いといわれていることから、栽培地ではサビダニが寄生した芽(接ぎ木苗)による分散が考えられる。しかし、自生地ではビワの種子により分布

を拡大すると考えられ、また中国から日本へのビワの伝搬経路も種子と考えられているので、これらの地点への本種の分散はどのような経路によるのか、現在のところ解明されていない。そのため今後はさらに中国南部からヒマラヤ南部にかけてのビワ原産地での本種の分布を調査し、日本への伝搬経路について明らかにする必要がある。

#### 引用文献

- 1) 大久保宜雄(1995 a) 九農研 57:110.
- 2) 大久保宜雄(1995 b) 九病虫研会報 41:139 (講要).

(1996年4月30日 受領)